

講演会まとめ

		法学部	経営学部
第1部	第8回FID講演会「今後の取組み」について、それ以降の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的なルールは学部で統一するが、内容については各教員の考え方によって展開するという方針。 2. 学部組織としての取組み <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業とそれをめぐる検討会の実施 ・新人教育・現職教員教育 ・授業評価結果の活用 ・ゼミ連合の発表大会 3. 各教員の取組み <ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントの活用 ・質問票の回収 ・ソクラテス・メソッドの実践 	<ol style="list-style-type: none"> 1. バブル期を越える就職状況 <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミナールの相互討論を通じて育まれたコミュニケーション能力が評価された
	学部の教育理念・具体的な到達目標（ゴール）および学生をどのように卒業させるか	<ol style="list-style-type: none"> 1. 法学部の学問分野は多岐に渡るため、学問分野別に考えたほうがよいのではないかと指摘がある。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教育上の特色 <ul style="list-style-type: none"> ・「4年間で一定の専門性を身に付ける」という自覚を促す、2学科・4コースの設置 ・語学力向上の意欲を高める、国際フィールドワークの実施 ・「起業講座」を開講（経済学部と共同） ・TOEIC・簿記・ファイナンシャルプランナー等の資格取得をサポート（エクステンションセンターとの連携） ・人脈が大きく広がる「ゼミナール協議会」の活動（オリエンテーション合宿、プレゼンコンテストなど） ・ゼミナールを中心とした少人数教育により、学生の成長過程を教員が集団として把握 ・教育問題の検討・改革を行う「教育制度改革委員会」を常設
	大学全入時代への対応	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実施したい取組み <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスの充実 ・オフィスアワーの時間帯の再検討 ・ソフト面のインフラ整備 2. 学生を講義に参加させる工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・経験型講義・実験などの展開 ・講義に関する研究会の実施 3. 推薦入試入学者への対応 <ul style="list-style-type: none"> ・入学までの期間に推薦図書を挙げ、レポートを課す 	<ol style="list-style-type: none"> 1. TOEIC600点以上の学生を30人以上に引き上げたい 2. 4年生の就職内定後の勉学意欲の刺激（大学院教育と連動した教育改革を検討したい）
第3部	加価値をつけた教育を受けた学生にどうにかに付けるか	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成20年度に関しては学生便覧にある通り 2. 平成21年度以降に関しては、現行の2学科制から1学科制への移行も含め、学部内の将来問題検討委員会を中心に検討中 3. 就職先は民間企業が多いため、社会人としてゼネラリストを養成する 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大学院教育との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・学部・大学院5年一貫制 ・国公私ジョイント教育機構…名大・名市大・名城大による地域教育機構 2. TOEIC・税理士・公認会計士等の資格取得をサポート
	大学全入時代に対応するかどうか	<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入教育・基礎力強化 <ul style="list-style-type: none"> ・「読み・書き・話す」能力をつけさせる 2. 少人数による基礎ゼミの充実 <ul style="list-style-type: none"> ・学科改組 ・カリキュラム改訂 	

		経済学部	理工学部
第1部	第8回FD講演会で発表した「今後の取組み」について、それ以降の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> カリキュラム改正（平成20年度から） <ul style="list-style-type: none"> 専門基礎科目の必修化 ゼミナール修得単位数の増加 全学共通教育「経済と社会」の必修化 英語の選択必修単位数の増加 韓国語を第二外国語に追加 誰でも授業の参観を可能に（教授会で決定） e-ラーニングの継続 	<ol style="list-style-type: none"> 実感教育・専門科目への導入教育に重点を置いたカリキュラムを編成 教育課程外の取組みも充実させる <ul style="list-style-type: none"> フレッシュマンセミナー 理工談話会 ロボコン エコカー
	卒業させるか （ゴール）および学生をどのようにに	<ol style="list-style-type: none"> 教育理念 <ul style="list-style-type: none"> 経済という窓を通して社会を見つめるとともに、社会に対して責任を持つ自立の人間を育てる 	<ol style="list-style-type: none"> 教育と研究に裏打ちされた人材の育成を図って、より高い付加価値を有する人材を社会に輩出していくことを目指す
	大学全入時代への対応	<ol style="list-style-type: none"> 実践的教育の実施 <ul style="list-style-type: none"> 新入生歓迎セミナー 日間賀島1日合宿セミナー 社会フィールドワーク・国際フィールドワーク ゼミナールフェスティバル 	<ol style="list-style-type: none"> 理工学教育推進センターの設置 <ul style="list-style-type: none"> 数学教育に関する教育改善（効果的な教育方法の企画） 習熟度別教育支援体制の確立 少人数教育の実践 リフレッシュマンセミナー（仮称）の実施 学内および学外の教育的取り組みの把握 教育フォーラムの開催 工学系全学科のJABEE認定を目指す 教育的外部資金の獲得 大学院教育の充実 学部再編改組検討委員会の設置 入学前教育・リメディアル教育の検討
第3部	加価値をつけた学生にいかにつけるか	<ol style="list-style-type: none"> 自立した人間・答えの出ない問題をしっかり考え、答えを出そうとする人間を育成する <ul style="list-style-type: none"> フィールドワーク ゼミ発表 卒業論文…優秀卒業論文の表彰 専門基礎・ゼミなどの必修化 e-ラーニングの活用 	<ol style="list-style-type: none"> 少人数教育の実施 習熟度別教育支援体制の確立 入試区分別追跡調査を実施し、そのデータに基づいた指導体制を確立する 日本語教育の必修科目化 JABEE教育 理工学基礎教育（数学、物理）の徹底
	大学全入時代に対応するか	<ol style="list-style-type: none"> 様々な機会を与え、それに対するモラル向上を図る（偏差値だけにこだわらない教育の提供） <ul style="list-style-type: none"> フィールドワーク TOEIC等資格取得のサポート 少人数教育のゼミ カリキュラム改正 e-ラーニングの活用 	

		農学部	薬学部
第1部	第8回FD講演会で発表した「今後の取組み」について、それ以降の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> 1年次必修科目として概説を開設 …学科の理解・モチベーションの向上を図る 指導教員制度（履修指導・学生生活の相談）の実施 授業内容・方法の改善（学科/個人） 実験科学の重視 <ul style="list-style-type: none"> ・学生実験機器の充実 ・全教員が指導にあたる…学生とのコミュニケーションを図る 平成21年度から、学科の教育の柱と授業科目、学年配当との関係を時系列で学生に明示することを検討 「驚きと感動を与える授業の実践」については各教員の努力に任せる 学生に勉強させる努力 フレッシュマンミキサーの実施(実施学科が増加) 	<ol style="list-style-type: none"> 1.「オリエンテーション講義」「まとめ講義」の導入 2.講義内容の明確化・科目相互の関連性を強調 …一部の系列では進んでいる 3.演習科目の導入 4.形成的評価の導入…各教員に任せているのが現状 5.同一科目の試験問題および評価基準の統一…進捗状況に差あり 6.指導教員制の活用
	卒業させるか （ゴール）および学生をどのよう に卒業させるか	<ol style="list-style-type: none"> 1.生物資源の有効利用と安定的な生物生産、生命現象の解明、食品機能・生物機能の応用、生物と人と自然との調和がとれた環境の創出について教育を行い、人類の生活の向上に貢献する。 2.生命・食料・環境に関する教育と研究を行い、農学に対する幅広い専門的学識と洞察力を有し、創造力と実践力を備えた技術者、または農学の素養ある教養人として社会に貢献できる人材を養成する。 3.絶えざる教育の改善を行い、より高いレベルの人材を養成して社会評価を高め、選ばれる学部を構築する。 	<ol style="list-style-type: none"> 1.患者中心の医療を実践するため、「くすりの専門家」として医療の質の向上に貢献できる高度な専門知識と臨床技能を有する薬剤師を養成する。 2.幅広い薬学の知識と技能に加え、特定の分野に深い専門性を有する薬剤師を養成する。 3.論理的思考力と科学的視点を有し、薬学及び生命科学研究を推進できる医療人を養成する。 4.探究心と創造力を有し、薬剤師としての新しい職能の開拓・発展に寄与できる医療人を養成する。
	大学全入時代への対応	<ol style="list-style-type: none"> 1.危機感や学部学科の方向性を共有して行動することが必要 2.専門基礎の充実 3.学生実験の充実 	<ol style="list-style-type: none"> 1.未履修科目への対応 レベル別クラス編成による補習講義の実施（物理・数学） 2.演習授業の実施 3.成績不振者に対する補講の導入 4.PBLやSGL、エイジ・ミキシング法の改善と充実 5.系統的な授業体系の構築 6.入試制度の見直し 7.偏差値の低い学生の教育対策
第3部	付加価値をつけるか 入学した学生にいか に教育理念とゴール を伝えるか	<ol style="list-style-type: none"> 1.教育理念 ・生命・食料・環境 2.ゴール ・卒業研究・演習・実験・実習を通じ、学生と教員間のコミュニケーションを高く維持することによって、洞察力・創造力・実践力を養成する 	<ol style="list-style-type: none"> 1.リーダーシップの取れる学生を教育 2.自信を持って社会に出て活躍できる学生を育成 3.持っている知識を正確にアウトプットできる人材を養成 4.社会に出た先輩の評価に基づく教育の実践
	応ずるか 大学全入時代 に 対 し て の よ う に 対 応 す る か	<ol style="list-style-type: none"> 1.成績面で幅の広い学生が入学してくることに ついての対応 ・入学時点で不足部分を補えるような履修登録 ガイダンスの充実 2.研究力・研究に裏打ちされた教育力・社会貢献 を通して、大学のブランドを高める 	<ol style="list-style-type: none"> 1.入試問題の検討（考える問題に） 2.基礎学力の向上、成績不振者のレベルアップ ・導入教育の実施 3.教育コースの多様化・少人数教育の実施 4.エイジ・ミキシング教育法の改善 5.対策委員会の設置

		都市情報学部	人間学部	センター
第1部	第8回FD講演会について、それ以降の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> サービスサイエンスという視点から見た学部の再構築 <ul style="list-style-type: none"> 教員の各アイテムに対する、満足度と期待度の絶対評価を測定するような調査を実施したい 会議を減らし、学生と過ごす時間を増やす 教員は講義や研究の市場価値を高めるべく努力する 担任制度 進級判定の実施 少人数教育（ゼミナール） 	<ol style="list-style-type: none"> 新カリキュラムを始動 <ul style="list-style-type: none"> フィールドワークの新設 海外研修の新体制を準備 基礎ゼミナール・指導教員制度 必修講義への出席状況調査・出席不良学生への対応 GPAの算出・成績不良学生への対応 1年次後半から2年次にかけての生活指導を強化 <ul style="list-style-type: none"> 父母後援会広報誌にて注意を呼びかけ 父母懇談会における個別面談にて注意を呼びかけ 	/
	学部の教育理念・具体的な到達目標（ゴール）および学生をどのように卒業させるか		<ol style="list-style-type: none"> 豊かな人間性に裏打ちされた広い視野と深い教養、国際的な舞台でも臆せず活躍できる柔軟な思考力と果敢な行動力を備えた「人間性豊かな実践的教養人」 	
	大学全入時代への対応		<ol style="list-style-type: none"> 入試が全入状態にならないよう、人間学部の魅力を高め、伝える <ul style="list-style-type: none"> カリキュラムの魅力を高める 学修サポートへの信頼度を高める（学業不振者対策を含む） 推薦入試入学者対策…学力とモチベーションの向上 一般入試対策…人間学部の実績を正確に高校や受験生に浸透させる 	
第3部	学教育理念とゴールに付加価値をつけるか	<ol style="list-style-type: none"> 学部独自の評価を導入 基本的な判断能力の育成 学生の「お客様意識」を払拭させる <ul style="list-style-type: none"> 担任制度の導入 保護者アンケートの実施 科目群会議を設置したい 	<ol style="list-style-type: none"> 学生に現状把握と自覚を促す生活指導 <ul style="list-style-type: none"> カウンセラー配置など新システムの検討 英語教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> TOEICの目標値を引き下げ、達成人数増加を図る 課題を義務づける 	<ol style="list-style-type: none"> 父兄や高校からの評価にも目を向けた付加価値を考える 自発的行動ができる学生の育成 国際的研究の支援 各部署の連携・支援体制の整備が必要
	大学全入時代においてどのように対応するか		<ol style="list-style-type: none"> 選ばれる大学になるための努力 <ul style="list-style-type: none"> 学ぶおもしろさを発見させる 自発的な自宅学習の動機付けを図る 	<ol style="list-style-type: none"> 特別授業・補習の実施（教職センター） 学生に担当教員をつける（教職センター） 全学共通教育独自のアンケートを実施（大学教育開発センター） サーバ運営を通しての学習支援（情報センター） 飛び級学生への対応、研究プログラムの調整（総合数理教育センター）

【当日資料】

講演会の趣旨説明

第9回FD講演会

教育向上に対する各学部等の取組み(FD)
 ー学生の目線に立ったFDの遂行ー

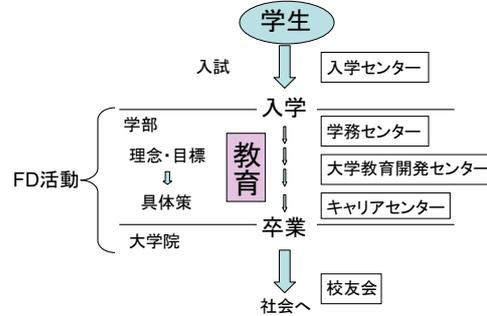
イントロダクション(9:10~9:20)

第1部(9:20~11:45)
 各学部長による基調講演
 入学センター長による基調講演

第2部(13:10~14:40)
 各学部討論

第3部(15:00~16:00)
 討論結果発表
 パネルディスカッション
 締めくくり(16:00~16:30)

学生の目線に立ったFD活動の遂行



名城大学FD委員会の活動

FD企画委員会

- FDワークショップチーム
 - 講演会
- 自主開発チーム
 - 授業参観・公開授業
- 学生満足度チーム
 - 学生による授業評価アンケート
- FD出版チーム
 - 「教育年報」、「FDニュース」、「活動報告書」

FD講演会開催記録

回	開催日	テーマ	講師	講演テーマ
第一回	H12.12.29	大学力を創るFD	東海大学理学部教授 安岡高志	学生による授業評価から
第二回	H13.12.6	大学力を創るFD	名城大学高等教育研究センター教授 池田輝政 名城大学理工学部教授 杉下薫二	シラバスを授業に生かす 学生による授業評価から授業の改善に向けて
第三回	H14.10.31	大学力を創るFD	京都大学高等教育教授システム開発センター助教授 大山孝宏	名城大学公開授業の4年間
第四回	H15.11.13	大学力を創るFD	名城大学高等教育研究センター教授 池田輝政	学生による授業評価アンケートから授業をどう変えるか
第五回	H16.5.24	大学力を創るFD	名城大学法学部教授 野上博義 名城大学理工学部教授 石原正一 名城大学薬学部助教授 小森由美子	魅力ある授業展開に向けて
第六回	H17.3.8	大学力を創るFD ～学部別からの発表～	山形大学高等教育研究企画センター教授 小田隆治 名城大学農学部部長 新田直祐	FDの開発 魅力ある農学部を目指して
第七回	H17.12.15	大学力を創るFD ～学部別からの発表～	東京電機大学教授 中村真五	多様化する学生に対応する学部デザインを考える
第八回	H18.11.6	大学力を創るFD ～学部FDからの発表～	名城大学法学部部長 山本忠弘 名城大学経済学部部長 岸川貴昭 名城大学経営学部部長 文部清司 名城大学理工学部部長 下山浩 名城大学農学部部長 菊池達 名城大学薬学部部長 金田典雄 名城大学都市情報学部部長 小池聡 名城大学人間学部部長 伊藤俊一	教育向上に対する各学部等の取組み

第1部 各学部長による基調講演

大学全入時代 ーその教育とゴールー

各学部の教育の現状の把握

- 1 第8回講演会で発表された「今後の取組み」のその後
- 2 教育理念とそのゴール
- 3 大学全入時代にどのように対応するか

→ 効果的なFD活動

第1部 入学センター長による基調講演

最近の入試動向と今後の方策
 ～入試改革と教育改革～

→ 効果的なFD活動

講演会の趣旨説明

第9回FD講演会

第1部 (9:20~12:00)

○各学部長による基調講演(9:20~11:00)

法学部

経営学部

経済学部

理工学部

農学部

薬学部

人間学部

都市情報学部

○休憩(11:00~11:10)

○入学センター長による基調講演(11:10~11:30)

○総括質疑応答(11:30~12:00)

第2部 各学部における討論

(13:10~14:40)

討論テーマ

- 1 教育理念とゴール ー入学した学生に
いかに付加価値を付けるかー
- 2 大学全入時代において貴学部は
どのように対応するか

第2部 各学部討論会会場

法学部: 共通講義棟北N505

経営学部: 10号館3階第2会議室

経済学部: 共通講義棟北N234

理工学部: 共通講義棟北N102

農学部: 共通講義棟北N237

薬学部: 共通講義棟北N411

人間学部: 共通講義棟北N412

教職センター、大学教育開発センター、情報センター

総合数理教育センター、都市情報学部:

共通講義棟北N410

第3部 討論結果発表

(15:00~16:00)

各学部長からの討論発表(各3分)

各学部長によるパネルディスカッション
(30分)

まとめ(16:00~16:30)

FD委員長からの講評

学長からの講評

閉会の辞

大学全入時代－その教育とゴール－

法学部

1 法学部における授業改善の現状

法学部の組織として
各教員の個人として

- (i) FD の理解と改善
- (ii) 公開授業とそれをめぐる検討会
- (iii) 各教員による「授業改善」の工夫

(1) 全学的な FD の共通事項

授業改善の例として、「声が小さい」、「学生がこれまでに習っていない 学問の習得を前提に授業を進めている」

(2) 固有学問分野の事項、 学問分野別に考えた方がよい事項

(3) 合意が得られれば実施できる事項

シラバス、オフィスアワーの時間帯、ソフト面のインフラ整備、

(4) 学生の授業へのパーティシペイション

(5) TA 活用の授業展開

(6) 全学的教育実績の蓄積

2 FD イクスペリメント

- (i) 学生による授業評価の実施
- (ii) 教員相互の授業参観
- (iii) 授業についての研究会
- (iv) 新任教員等のための研修会

3 法学部の実績

(1) 組織として

新人教育、現職教員、授業評価結果の活用

(2) 教員個人として

教員の研究に基づいた教育

授業ならびに教育は改善されているか

理解が容易な分かりやすい授業の実施

経営学部教育の現状・課題と将来展望

第9回FD講演会（2007年11月5日）

経営学部長 森川 章

1) 経営学部教育の現状

<教育の目的と理念>（「2007年度経営学部学生便覧」2-5頁）

「経営学部は、経営学、会計学、マーケティングおよび関連諸学の理論的研究をベースにして、グローバル化・情報化が進展している社会における企業・組織の行動や経営環境の変化を多角的・総合的に教育する。また本学部は、広範な教養を養い実践的能力と開拓精神あふれる、創造的な知性と豊かな人間性を備えた有能な人材を養成し、あわせて学術・文化の発展に寄与することを目的としている。」

<教育上の特色>（経営学部HP）

①多彩な進路に対する2学科・4コース。

経営学科：「マネジメント」、「会計・ファイナンス」、「流通・マーケティング」のいずれかのコースを選択し、深く専門性を身につける。

国際経営学科：「国際経営コース」では、高度な英語力、情報処理能力を身につけ、国際経済・経営・文化への適応力を向上させる。

②フランスや中国などで、国際フィールドワークを実施。

現地の企業視察や学生との交流を盛り込み、国際感覚や語学力を磨く。さらに交換留学生度で語学力のブラッシュアップも可能。

③経営トップの生の声を聞く「起業講座」を開講。（経済学部と共同）

授業で学ぶ経営理論が現場でどのように実践されているかを知ることができる。ビジネス界の第一線で活躍するトップの経験談、経営・経済理論は、学生たちに大きな刺激を与えている。

④エクステンションセンターと連携して資格取得をサポート。

システムアドミニストレータ、ファイナンシャル・プランナー、TOEICなど。

⑤人脈が大きく広がる「ゼミナール協議会」

学生たちが自発的に立ち上げた「ゼミナール協議会」では、論文コンクールやプレゼンコンテストなどを開催している。ゼミ同士の「横のつながり」による学部・学科・ゼミの枠を越えた人脈のほか、税理士・公認会計士・税務関係者などを会員としたOB組織との連携による人脈の広がりも魅力のひとつ。

⑥入学から卒業まで、ゼミナールを中心にした少人数教育。（学部HP外）

1年生：基礎ゼミ、2・3年生：専門ゼミ、4年生：卒論指導ゼミ

<注>⑤のゼミナール協議会が企画・立案する「新入生歓迎会・プレゼミ（オリエンテーション合宿）」、「プレゼンコンテスト」、「論文コンクール」は、経営学部のゼミナール教育と連動して展開されている。

⑦「教育制度改革委員会」による教育問題の検討・改革。(学部HP外)

ビジョン策定、制度改革、カリキュラム検討、等々を行う常設委員会。

2) 経営学部教育の成果と課題 (就職状況からの判断)

成果：バブル期を越える就職状況。

①上場企業への就職 (バブル期：60%→氷河期：30%→今日：60%)

②バブル期に就職できなかった企業へも就職している。

※ ゼミナールの相互討論を通じて育まれたコミュニケーション能力が、企業の要請 (社の内外におけるコミュニケーション能力の必要性) に合致した。

課題：①TOEIC：企業の要求は600点以上 (経営学の現状は約10人)

→30人以上に引き上げたい。(別の機会に議論したい)

②4年生の就職内定後の勉学意欲を刺激できていない。

→大学院教育と連動した教育改革。(本日の中心議題)

3) 大学院教育と連動した教育改革

＜経営学研究科の直面する課題＞

①留学生教育方針の再検討 (受け入れの規模、水準、教育内容について)。

②学部・大学院5年一貫制の確立 (当面の目標は税理士養成)。

③名大・名市大・名城大による「ジョイント教育機構」。

④ものづくりコースの再構築。

※ 上記の課題を解決し、経営学部の優秀な学生が進学を目指すような経営学研究科を確立する。

1. 実践的教育の実施

(1) 新入生歓迎セミナー

- ①地域の産業と街づくりを考えるコース（有松絞を観る）、
 - ②金融を考えるコース（日本銀行、野村証券）、
 - ③環境を考えるコース（リサイクル関連事務所）、
- など8コース。

(2) 日間賀島1日合宿セミナー

(3) 社会フィールドワーク・国際フィールドワーク（韓国、オランダ）

2. カリキュラム改正（平成20年度から）

- ①専門基礎科目の必修化、
- ②ゼミナールの修得単位数を増加（8単位→10単位）、
- ③全学共通教育の中の「経済と社会」を必修に、
- ④英語の選択必修単位を4単位から8単位に、
- ④韓国語を第二外国語に追加（4単位）。

3. ゼミナール・フェスティバル——先生と学生の共同作業。今年は12月1日に1日かけて40のプレゼンテーションを行う。

4. 授業参観——教授会で授業をだれでも参観できることを確約済み。また授業改善に関する経済学部の基本姿勢として、①授業に関する悩みをいつでも同僚に話せるようにする、②耳の痛いことを言ってくれる同僚を大切にする、③高度な研究、研究の独自性、それにもとづく授業の独自性を尊重する（統一の教科書作り、授業方法の標準化などは独自性を阻害する）、の3つの柱を確認している。

5. eラーニングの継続：経済学部の公式グループウェア「エコノグループ」を使用した各種講義とゼミで実施。

第9回FD講演会 2007. 11.5

教育向上に対する理工学部の取り組み —学生の目線に立ったFDの遂行—

大学全入時代
—その教育とゴール—

理工学部 江上 登

Meijo universityEgami Laboratory

理工学系学部に関する現状

- 18歳人口の激減・・・ピーク時と比較して激減
249万人(昭和40年), 205万人(平成5年)から
116万人へ
- 理工系志願者の激減・・・15年前と比較して半減
- 独立法人化による国立大学の二極化
・・・首都圏大学と地方大学の格差拡大
188国立大学工学系実質競争率1倍台

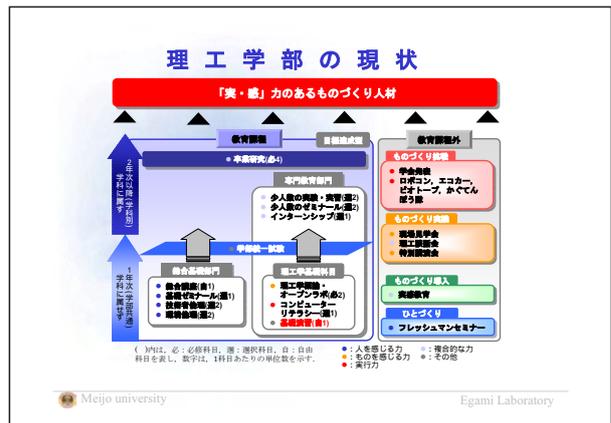
地方国立大学の学力低下
理工系私立大学・学部・学科の二極化と定員割れ

Meijo universityEgami Laboratory

日本工学教育協会年次大会のテーマ —大学全入時代の工学教育のあり方を考える—

- *工学部物理学における導入教育および学習支援の連携効果(摂南大学)
- *工学部における数学の補習教育による学習効果(摂南大学)
- *工学部基礎科目における少人数教育プロジェクトの実践(宮崎大学)
- *線形代数の成績から分析した大学全入時代学生の数学力(鳥取大学)
- *工学部教員の大学全入に対する問題意識(千葉大学)

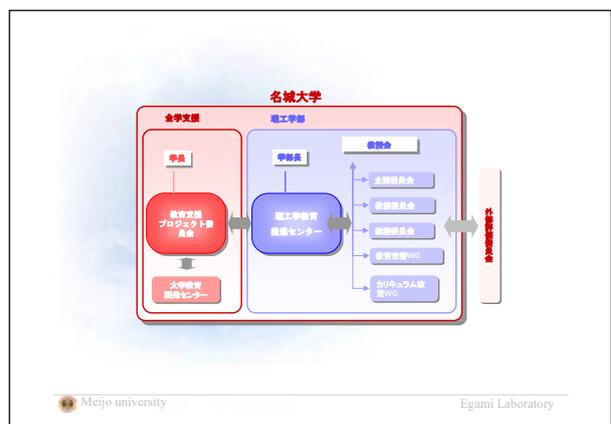
Meijo universityEgami Laboratory



理工学部が取り組むべき教育問題

(1) 理工学教育推進センターの設置 (平成19年5月)

Meijo universityEgami Laboratory



理工学教育推進センターが取り組む課題

- * 数学教育に関する教育改善(効果的な教育方法の企画)
- * 習熟度別教育支援体制の確立
- * 少人数教育の実践
- * リフレッシュマンセミナーの実施
- * 学内および学外の教育的取り組みの把握
- * 教育フォーラムの開催

(2) 工学系全学科のJABEE認定を目指す

認定学科:
電気電子工学科 機械システム工学科
交通科学科 建設システム工学科
建築学科

平成21年度申請予定学科
情報工学科 材料機能工学科
環境創造学科

JABEEが求める姿は社会に通用する
人材の育成

(3) 教育的外部資金の獲得

- 1) 教育GP, 大学院教育GPへの申請
- 2) 小・中・高校生を対象とした理科教育に関する申請

(4) 大学院教育の充実

- 1) 修士課程の進学率30%達成, 博士課程の入学定員確保
- 2) 大学院重点化構想の具体化
⇒施設面, 設備面, 新しいスタイルの研究科の構築

(5) 学部再編・改組の検討

平成19年9月, 学部再編・改組検討委員会設置
教員, 職員, 附属教諭, 卒業生, 父母により構成

おわりに

理工学部は、教育と研究に裏打ちされた人材の育成をはかり、
より高い付加価値を有する人材を社会に輩出していくことを目指します

農学

- ・食料不足、食嗜好の多様化、食の安全・安心、環境汚染、地球温暖化、エネルギー不足など、生命、食料、環境などに関わる問題の解決・改善に取り組む学問。

農学部

生物資源学科
応用生物化学科
生物環境科学科

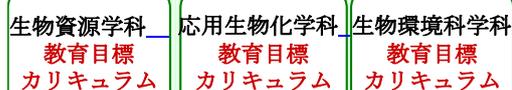
農学部の教育理念

農学部は、生物資源の有効利用と安定的な生物生産、生命現象の解明、食品機能・生物機能の応用、生物と人と自然との調和がとれた環境の創出について、教育を行い、人類の生活の向上に貢献する。

人材の養成の目的その他の教育
研究上の目的 (H19年度)

農学部は、生命・食料・環境に関する教育と研究を行い、農学に対する幅広い専門的学識と洞察力を有し、創造力と実践力を備えた技術者または農学の素養ある教養人として社会に貢献できる人材の養成。

人材養成



カリキュラム

1 年	2 年	3 年	4 年
全学共通教育			
専 門 教 育			
基礎教育	基幹的科目	応用的科目	卒業研究
実 験 ・ 実 習 ・ 演 習			

H18年度報告 教育向上への取り組み

1. 3学科とも1年次に概説(学科全教員)
学科の理解とモチベーションの向上
2. 学生実験機器の充実、生物学実験と化学実験(全教員)実験科学の重視、学生とのコミュニケーションを図る
3. 学科あるいは個人の創意工夫による授業内容・方法の改善
4. 指導教員制度
学生の履修指導や学生生活の相談

平成18年度 FD講演会「今後の取り組み」

- 学習目標とカリキュラムの関係
21年度から、学科の教育の柱と授業科目との関係を表にし、学生に明示することについて検討。
- 授業満足度の向上
驚きと感動を与える授業:教員の努力に任せている。
- 学生に勉強させるための努力
例)授業→宿題→採点→返却→説明(5回実施)
- FDの推進
ミキサーの推進:昨年1学科→今年2学科

大学全入時代

危機感や学部学科の方向性を共有し、行動

1. 優秀な学生・意欲のある学生
2. 人材養成
 - ① 教養教育
 - ② 専門教育
 基礎を充実
 フィールドおよび実験科学が重要
 ⇒実験実習を充実

農学部A方式学力入試難易度推移

	05年度	06年度	07年度	08年度 予想
生物資源 学科	47.5	45.0	45.0	42.5↓
応用生物 化学科	50.0	47.5	47.5	47.5
生物環境 科学科	45.0	45.0	45.0	42.5↓

農学部志願者数

	入学定員	05年度	06年度	07年度
生物資源学科	100	1224	796	885
応用生物化学科	100	1418	1400	1659
生物環境科学科	100	1062	1028	1021
農学部 合計	300	3704	3224	3565

人材養成に向けて

これまでのさまざまな努力に加え、

1. 専門基礎を充実

- 基礎教育科目群：生物と化学
1年次前期に各4単位を実施。
- 専門教育科目群（21年度以降）
生物資源学科：作物生産科学、植物分類・形態学、動物分類・形態学、微生物学、生命科学の技術等
生物環境科学科：生物環境科学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（基礎的生命科学）

2. 学生実験を充実

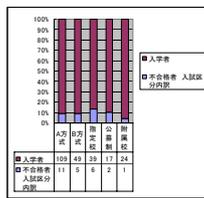
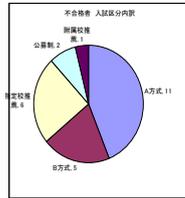
応用生物化学科必修
生物環境科学科必修（21年度以降）

ゴール

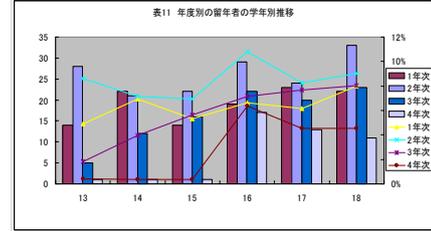
絶えざる教育の改善を行い、より高いレベルの人材を養成して社会評価を高め、選ばれる学部を構築する。

2年生の前期の段階で留年が確定した学生の入試分析

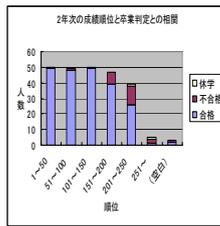
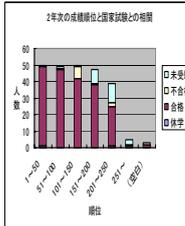
- 入試区別別不合格者
- 入試区別別不合格者



年度別の留年者の学年別推移



2年次の成績順位と卒判・国試との相関関係



学習の効果

- 教える 80~90%
- 体験する 70%
- 討論する 50%
- レポートを書く 30%
- 視聴覚 10~20%
- 講義を聞く 5%

未履修問題とゆとり教育世代への対応

薬学準備教育科目群の
基礎物理学

↓
プレースメントテストを実施し、補習対象者を絞り、月曜の5時限目と火曜日の5時限目に物理と数学の補習講義を実施した。
物理46名(1クラス) 数学88名(2クラス)

今年度の取り組み

- 基礎薬学演習の実施
- 成績不振者に対する補講の導入
- PBLやSGL、エイジ・ミキシング法の充実
- 系統的なわかりやすい授業体系の構築(機能形態学から疾患と治療)

まとめ(今後の課題)

- 入試制度の見直し
- 偏差値の低い学生を如何に教育するか？
- 低学年からの落ちこぼれを出さないような教育
- 勉学へのモチベーションを高めるために、PBLやSGD、エイジ・ミキシング法の効果の検証と改善への取組

教育目的

1. 患者中心の医療を实践するため、「くすりの専門家」として医療の質の向上に貢献できる高度な専門知識と臨床技能を有する薬剤師を養成します。
2. 幅広い薬学の知識と技能に加え、特定の分野に深い専門性を有する薬剤師を養成します。
3. 論理的思考力と科学的視点を有し、薬学および生命科学研究を推進できる医療人を養成します。
4. 探求心と創造力を有し、薬剤師としての新しい職能の開拓・発展に寄与できる医療人を養成します。

サービスサイエンスという視点からみた
FD活動について
— スーパーFD評価の提案—

都市情報学部長 木下栄蔵

2007.11.5(月)

大学はサービス産業なのか？

1) 従来のサービス財としての側面を有する。

↓
満足度最大(講義・ゼミ等)

2) 大学固有のサービス財としての側面も有する。

↓
効用度最大(講義・ゼミ等)
(知的付加価値)

3) 1)2)を同時に満たすための必要かつ十分な条件としての環境整備が必要である。

サービス財の特徴は前述の1),2)とも以下に示す通りである。

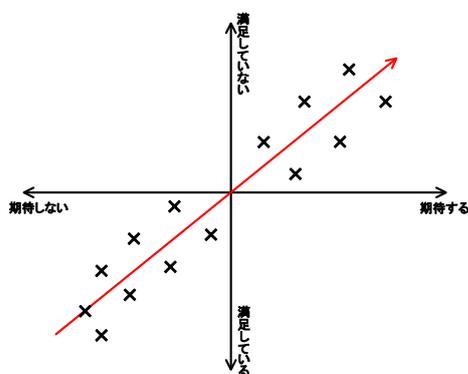
需要と供給が同時に発生する。すなわち、サービス財の重要な点は機会(chance)であり、機会(chance)は原則として貯蓄できない。

現在の講義等の満足度調査は必要かつ十分な条件を満たしている調査か？

満足度最大と効用度最大を同時に満たすために我々は何をすべきなのかを知る必要がある。 → 調査の必要性

各講義・ゼミ等における各アイテムに対して、以下の2つの調査をする必要がある。

- 1) 各アイテムに対する満足度調査 (不満 ←————→ 満足)
- 2) 各アイテムに対する期待度調査 (期待しない ←————→ 期待する)



現状の各アイテムに対して「満足していないが期待する」ベクトルにそって講義等における各アイテムの改善優先順位が決定される。



その結果に対して我々は謙虚に従うべきである。

また、この調査の目的は、各教員間の相互比較にあるのではなく、個々の教員が改善すべきアイテムを認識することにある。

3) 環境整備とは

『我々は、教育と研究に関して学生といかに長い時間接することができるか』という究極のテーマに挑戦すべきである。

そのためには、我々(教員)の会議は、できる限り減らし(回数)、1回にかける時間をできる限り短くし(時間)、できる限り資料(会議における)を少なくすることが必要である。

サービスサイエンスの精神

またサービスサイエンスの精神は、資本主義の精神(マックスウェーバー)に繋がるものと思われる。

結論

我々(各教員)は自らの講義等(研究も含めて)の市場価値を高める必要がある。

人間学部における学業不振対策

平成 19 年 11 月 5 日 F D 講演会 人間学部長 伊藤俊一

生活指導を含めた学業不振対策の重要性

- ・学習習慣がきちんと身に付いていない学生が入学してくる。
- ・精神的に不安定な学生が入学して来る。
- ・入学後の生活習慣が学業成績に大きく関係する。

人間学部での取り組み

- ・基礎ゼミナール、指導教員制度
- ・講義出席調査、出席不良学生への対応
- ・G P A の算出、成績不良学生への対応

学業不振の原因調査

- ・今年度前期の学業不振者（G P A 1.0 未満および修得単位数不足）のべ 61 名に対して学務委員が 3 度にわたって面談指導を行った。その際に別紙の調査表にて、学業不振の原因を調査した。
- ・学業不振に陥る最大の原因は、過大なアルバイトによる生活習慣の乱れにあることが判明し、特に 1 年次後半～2 年次にかけての対策が必要であることが認識された。
- ・結果については父母後援会の広報に掲載し、注意を呼びかけた。また父母懇談会における個別面談にも活用した。

人間学部の教育理念・目標

豊かな人間性に裏打ちされた広い視野と深い教養，国際的な舞台でも臆せず活躍できる柔軟な思考力と果敢な行動力を備えた「人間性豊かな実践的教養人」

「大学全入時代」への対応

- ・入試が「全入」状態にならないために人間学部の魅力を高め、伝える。
カリキュラムの魅力を高める。学修サポートへの信頼度を高める。
- ・推薦入試：入学生の学力とモチベーションを高める対策を進める
国際クラスとの連携、指定校との連携
- ・一般入試：人間学部の教育・研究内容と実績を正確に高校・受験生に浸透させる
入試広報内容の改善、ホームページの充実

学習指導用チェックリスト

I. 基礎的な情報

1	学生の氏名	
2	学年・学籍番号	
3	修得単位数	
4	GPA	
5	英語の授業の欠席回数	
6	休学期間	有 () 年 無
7	生活環境	自宅 下宿 その他 ()

II. 以下の項目について、学生の状況に当てはまる度合いに応じて該当する番号を○で囲んでください。

とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
5	4	3	2	1

1	バイトで忙しい	5	4	3	2	1
2	サークル、部活動、その他の遊びで忙しい	5	4	3	2	1
3	朝起きるのに苦勞する	5	4	3	2	1
4	規則正しい生活を送っている	5	4	3	2	1
5	大学生活は楽しい	5	4	3	2	1
6	友達がたくさんいる方だ	5	4	3	2	1
7	授業に出たくない気分になることが多い	5	4	3	2	1
8	授業に出ることは大事だと思う	5	4	3	2	1
9	大学の勉強は難しいと感じる	5	4	3	2	1
10	試験の準備やレポートの書き方がわからない	5	4	3	2	1
11	身体は健康である	5	4	3	2	1
12	心理的に健康（ストレスや悩みがない状態）である	5	4	3	2	1
13	家庭環境はよい	5	4	3	2	1

人間学部

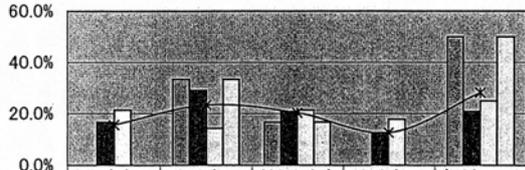
III. 学生の学業不振の主な原因として最も当てはまると思われる項目の番号を○で囲んでください。

1. 学業以外のことを優先して勉強しない（サークル活動、遊びなど）
2. 経済的事情のためにバイトせざるを得ない
3. 授業が難しくてよく理解できない
4. 勉強する方法がわからない
5. 大学生活に馴染めない
6. 家庭不和や経済的事情など、大学以外の問題を抱えている
7. 心身の健康状態に問題がある
8. その他（具体的に： _____)

IV. その他学生についてお気づきのことがありましたらお書きください。

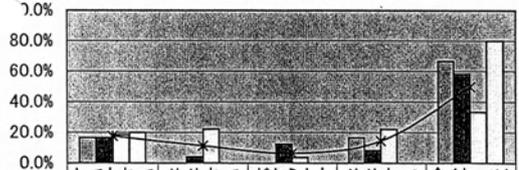
記入者氏名： _____

1 バイトで忙しい



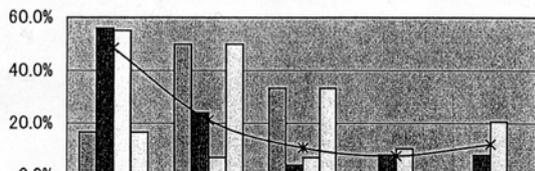
	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	0.0%	33.3%	16.7%	0.0%	50.0%
2年	16.7%	29.2%	20.8%	12.5%	20.8%
3年	21.4%	14.3%	21.4%	17.9%	25.0%
4年	0.0%	33.3%	16.7%	0.0%	50.0%
＊-合計	15.6%	23.4%	20.3%	12.5%	28.1%

2 サークル、部活動、その他の遊びで忙しい



	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	16.7%	0.0%	0.0%	16.7%	66.7%
2年	16.7%	4.2%	12.5%	8.3%	58.3%
3年	18.5%	22.2%	3.7%	22.2%	33.3%
4年	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	80.0%
＊-合計	17.7%	11.3%	6.5%	14.5%	50.0%

3 朝起きるのに苦労する



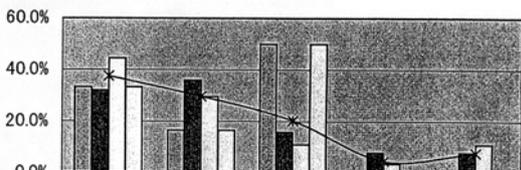
	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	16.7%	50.0%	33.3%	0.0%	0.0%
2年	56.0%	24.0%	4.0%	8.0%	8.0%
3年	55.2%	6.9%	6.9%	10.3%	20.7%
4年	16.7%	50.0%	33.3%	0.0%	0.0%
＊-合計	48.5%	21.2%	10.6%	7.6%	12.1%

4 規則正しい生活を送っている



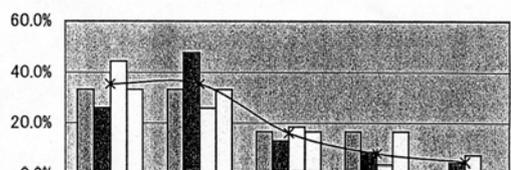
	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	50.0%	16.7%	0.0%	16.7%	16.7%
2年	13.0%	17.4%	8.7%	34.8%	26.1%
3年	15.4%	19.2%	19.2%	23.1%	23.1%
4年	50.0%	16.7%	0.0%	16.7%	16.7%
＊-合計	21.3%	18.0%	11.5%	26.2%	23.0%

5 大学生活は楽しい



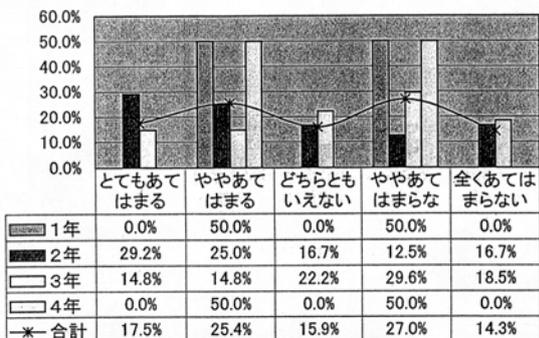
	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	33.3%	16.7%	50.0%	0.0%	0.0%
2年	32.0%	36.0%	16.0%	8.0%	8.0%
3年	44.4%	29.6%	11.1%	3.7%	11.1%
4年	33.3%	16.7%	50.0%	0.0%	0.0%
＊-合計	37.5%	29.7%	20.3%	4.7%	7.8%

6 友達はたくさんいる方だ

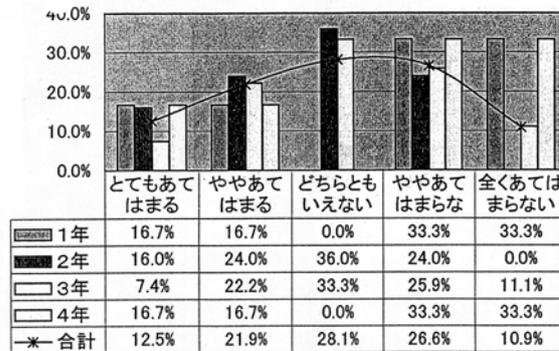


	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	全くあてはまらない
1年	33.3%	33.3%	16.7%	16.7%	0.0%
2年	26.1%	47.8%	13.0%	8.7%	4.3%
3年	44.4%	25.9%	18.5%	3.7%	7.4%
4年	33.3%	33.3%	16.7%	16.7%	0.0%
＊-合計	35.5%	35.5%	16.1%	8.1%	4.8%

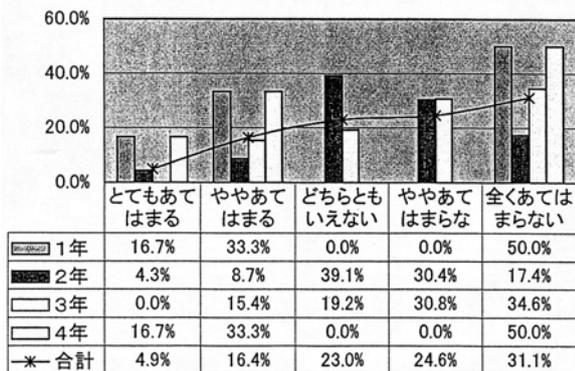
7 授業に出たくない気分になることが多い



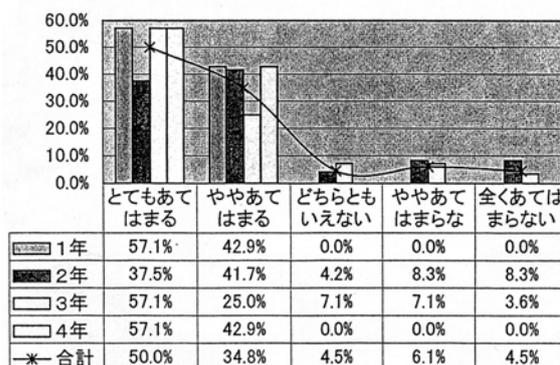
9 大学の勉強は難しいと感じる



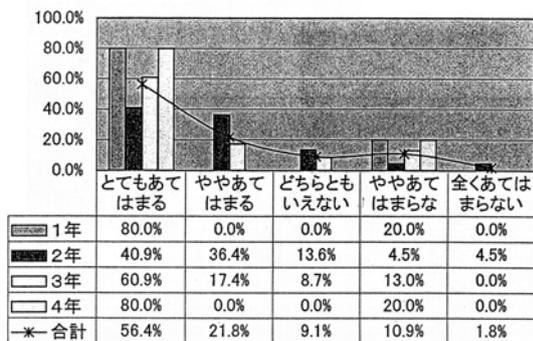
10 試験の準備やレポートの書き方がわからない



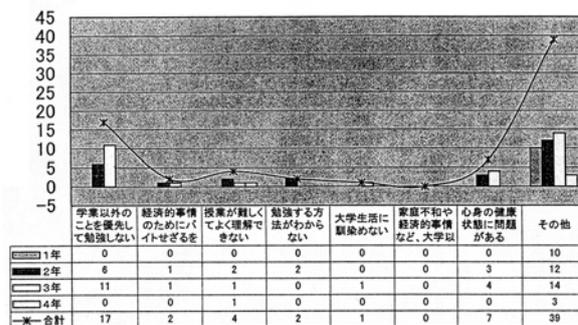
12 心理的に健康(ストレスや悩みがない状態)である



13 家庭環境はよい



学業不振の主な理由



入学センター長

平成19年度FD講演会

「最近の入試動向と今後の方策 ～入試改革と教育改革～」

話題提供者: 入学センター長
板橋一雄

- 話題 1 18歳人口と進学率の変化
- 話題 2 入試改革と今後の検討課題
- 話題 3 学生の多様化と教育改革
- 話題 4 学生・教員と教育システム

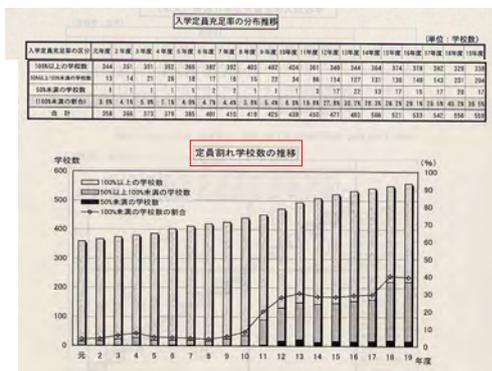
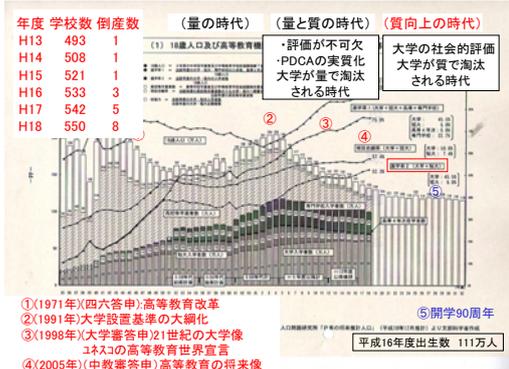
○「大学冬の時代」、「大学淘汰の時代」、「全入時代」
⇒20年ほど前から叫ばれてきた
実際にいくつかの学校法人が倒産し始めた

○名城大学は、「現状維持」、「なにも変えない」
「現状のまま改革しない」でいいか？
⇒何もしなければ、さらに厳しくなるこれからの
時代におそらく、生き残れないであろう
⇒種々の側面の改善・改革が必要

○改革のためには、まず「危機意識の共有」が必要！
* 周辺環境の把握(社会経済情勢・社会の要請
18歳人口変化・文部科学省の方針など)
* 内部状況の把握(学部などの長所・短所、
法人・教学、教職員などの能力)

話題1 18歳人口と進学率の変化

- 18歳人口の変化と大学・短大進学率
- 大学・短大入学者数≒70万人
- 私立4年制大学数=559校(平成19年度)
学校法人倒産数=7校(平成18年度)
- 文部科学省の方針⇒種々の答申
- 本学の1995年以降の入試動向
* 入学者数・出願者数
* 偏差値の変化



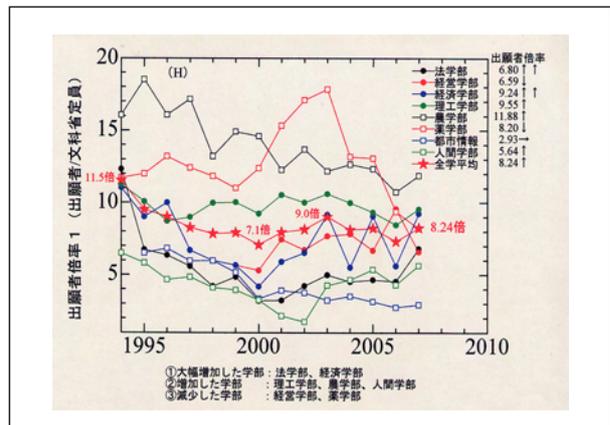
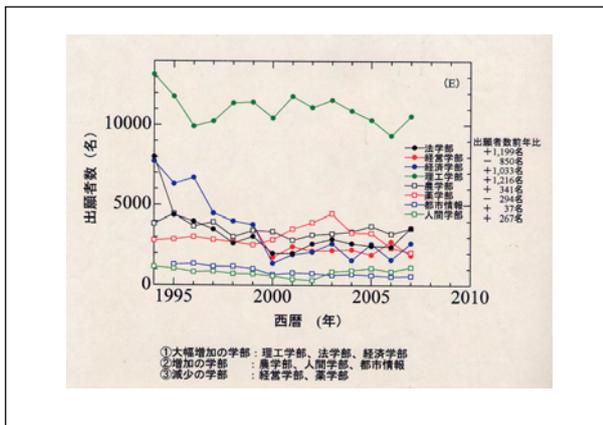
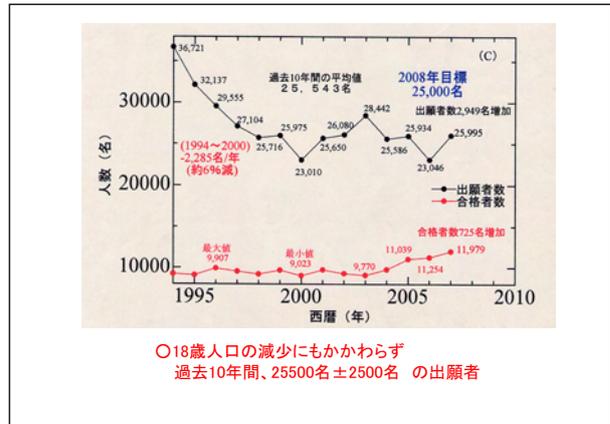
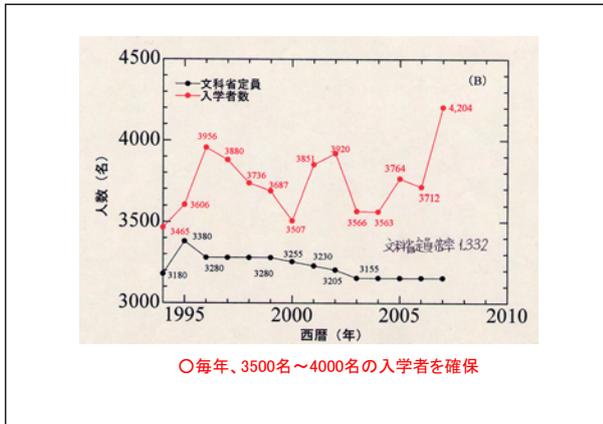
○(1998年、大学審議会答申)
* 「21世紀の大学像と今後の改革方策について
～競争的環境の中で個性輝く大学～」

○(1998年、ユネスコ高等教育世界会議)
* 「21世紀に向けての高等教育世界宣言
-展望と行動-

○(2000年、大学審議会答申)
* 「グローバル化時代に求められる高等教育の
在り方について」
* 「大学入試の改善について」

○(2005年、中教審答申)
* 「我が国の高等教育の将来像」⇒重要！
* 「新時代の大学院教育-国際的に魅力ある
大学院教育の構築に向けて-

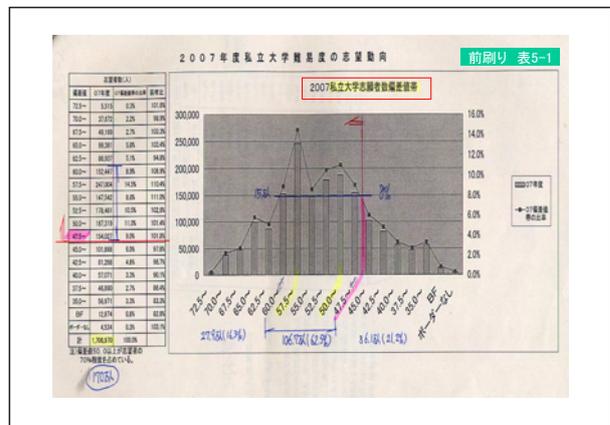
入学センター長



前刷りの表

名城大学 学部別合格難易度推移(02～08年度)

学部	学科	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度
法	法学	45.0	47.5	47.5	47.5	42.5	42.5
	応用英検法	45.0	42.5	40.0	42.5	40.0	40.0
	法学	42.5	47.5	47.5	45.0	42.5	40.0
	応用英検法	40.0	45.0	40.0	42.5	40.0	40.0
経	経営	45.0	47.5	47.5	45.0	47.5	45.0
	国際経営	45.0	42.5	50.0	45.0	45.0	42.5
	経営	45.0	47.5	45.0	47.5	45.0	45.0
	産業経営	42.5	45.0	45.0	45.0	42.5	42.5
人	人間	45.0	47.5	47.5	45.0	40.0	40.0
	工学	50.0	50.0	50.0	50.0	42.5	42.5
	情報工学	47.5	47.5	50.0	47.5	45.0	42.5
	応用電子	45.0	47.5	50.0	47.5	45.0	42.5
理	機械工学	47.5	47.5	50.0	47.5	45.0	42.5
	材料機械工	45.0	47.5	50.0	47.5	45.0	42.5
	機械システム	47.5	50.0	50.0	47.5	45.0	42.5
	応用電子	42.5	45.0	45.0	42.5	40.0	40.0
精	情報工学	42.5	42.5	47.5	47.5	42.5	40.0
	情報科学	42.5	42.5	47.5	47.5	42.5	40.0
	情報科学	42.5	42.5	47.5	47.5	42.5	40.0
	情報科学	42.5	42.5	47.5	47.5	42.5	40.0
農	畜産資源学	47.5	50.0	50.0	47.5	45.0	45.0
	応用動物化学	52.5	52.5	52.5	50.0	47.5	47.5
	畜産資源学	47.5	50.0	50.0	47.5	45.0	45.0
	畜産資源学	47.5	50.0	50.0	47.5	45.0	45.0
薬	薬学部	57.5	60.0	60.0	60.0	55.0	52.5
	薬	55.0	60.0	60.0	55.0	52.5	52.5
都	都市情報	37.5	40.0	42.5	40.0	37.5	37.5
	都市情報	37.5	37.5	37.5	37.5	35.0	35.0



入学センター長

前刷りの表 難度別の志望動向(第2回全統マーク模試より)

偏差値	05年度	07年度	前年比
72.5~	6,136	5,211	84.9%
70.0~	23,258	21,752	93.5%
67.5~	25,900	23,069	89.1%
65.0~	51,039	53,259	104.3%
62.5~	49,831	45,521	91.4%
60.0~	31,596	29,959	94.8%
57.5~	116,389	113,548	97.6%
55.0~	81,071	73,179	89.9%
52.5~	103,736	98,026	94.5%
50.0~	113,559	105,841	93.2%
47.5~	90,984	86,005	94.5%
45.0~	69,367	59,223	85.5%
42.5~	83,907	69,862	83.3%
40.0~	49,534	44,868	90.6%
37.5~	38,749	33,672	86.7%
35.0~	58,266	42,514	73.0%
BF(ボーダーフリー)	27,328	22,319	81.7%
ボーダー無し	2,545	2,241	88.1%
全私立大	1,054,585	983,274	93.2%

※ボーダーフリーは推薦入学枠(推薦枠)ベース(同一枠内は下難度別を使用)
※集計は一般方式のみ集計

前刷りの表 名城大学 学部別合格難易度推移(02~08年度)

学部	学科	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度
法	法学	45.0	47.5	47.5	47.5	42.5	42.5	40.0
	応用法学	45.0	42.5	40.0	42.5	40.0	40.0	37.5
	法学	42.5	47.5	47.5	45.0	42.5	40.0	37.5
経営	経営	45.0	47.5	47.5	45.0	42.5	40.0	37.5
	経営経営	45.0	42.5	40.0	45.0	40.0	40.0	37.5
	経営	45.0	47.5	45.0	47.5	45.0	45.0	42.5
経済	経済	45.0	47.5	45.0	47.5	45.0	45.0	42.5
	産業社会	42.5	45.0	45.0	45.0	42.5	42.5	40.0
	人間	45.0	45.0	45.0	45.0	40.0	40.0	40.0
理工	工学	45.0	47.5	47.5	45.0	42.5	42.5	40.0
	情報工学科	50.0	50.0					45.0
	電気電子工学科	47.5	47.5					45.0
	材料工学科	45.0	47.5	50.0	47.5	45.0		42.5
	機械工学科	47.5	50.0					47.5
	交通工学科	42.5	45.0					40.0
	情報工学科							40.0
	交際科							40.0
	情報デザイン工学科	42.5	42.5	47.5	47.5	42.5		40.0
	情報システム工学科	45.0	45.0					40.0
農	農	47.5	50.0					42.5
	生物資源学科	52.5	50.0	50.0	47.5	45.0	45.0	42.5
	応用生物化学	52.5	52.5	52.5	50.0	47.5	47.5	42.5
薬	薬学部	57.5	60.0	60.0	60.0	55.0	55.0	50.0
	薬	55.0	60.0	60.0	60.0	55.0		52.5
	薬	57.5	60.0	60.0	60.0	55.0		52.5
都市情報	都市情報	37.5	40.0	42.5	40.0	37.5	37.5	35.0
	都市情報	37.5	37.5	37.5	37.5	35.0	35.0	35.0

注)一般入試方式(前期・後期)の難易度を示す。河合塾マーク模試結果データ参照。
注)08年度は、河合塾第2回全統模試結果データ参照。

話題2 入試改革と今後の検討課題

2.1 入試制度の改革
2.2 入試広報の強化

2.1 入試制度の改革

○昨年度入試の改革点

- * A方式入試日の増加
= 法学部・人間学部・都市情報学部を2日間
⇒ 6学部がA方式2日となった
- * C方式入試後期日程の新設= 農学部
⇒ 8学部すべてがC方式前・後期日程

○今年度入試の改革点

- * F方式入試の導入(センター試験+独自科目)
法・経営・経済・人間・理工・都市の6学部
文系学部では併願可能
- * M方式入試の導入(理工のみ)(マークセンス方式)
- * 系入試の改革(理工) 学科別入試の併用

○今後の検討課題○

- ①全学A方式複数日の設定
文系・理系別の統一試験へ
- ②文系・理系の入試教科・科目・出題範囲の統一
⇒ * 受験のし易さ
* 問題作成の負荷の軽減
- ③推薦入試の評価基準項目
出願に必要な書類の統一
- ④学内併願者の増加を目指す
南山大・中京大=1.8~2.0、本学=1.62
- ⑤出願高等学校数の減少の歯止め
- ⑥進学校(A・Bランク)からの出願者の確保
- ⑦偏差値に負けない魅力ある教育・学生の育成

⇒ 今後、入学センター委員会で議論していきたい

全学的な対応が必要な事項

○(短期)入試制度の改革を進める○

- * 出願・受験しやすいシステムづくり
- * 併願者を増加⇒(受験者の負荷軽減)
- * 入試問題の統一⇒(問題作成の負荷軽減)
- * 偏差値低下の防止⇒偏差値の高い大学
- * 就職率の高さを広報
- * 教育職員と事務職員の役割分担

○(中長期)教育・研究の質の高さを広報する○

- * 偏差値・就職率にとらわれない大学
- * 教育力・研究力の向上に努める(教育職員)
- * 学生満足度の向上に努める(教育・事務職員)

⇒ 学生は満足して学生生活を送り、一定の能力を身につけて社会で活躍する
⇒ 社会から、教育の質の高い大学と評価される

2.2 入試広報の強化

- ①重点地域の設定
- ②高校訪問の強化
- ③入試案内、大学案内、行事、HPなどの充実
- ④WEBサイトでの各種案内、資料との申込み
- ⑤高校説明会、大学見学会の強化
- ⑥進学相談会、オープンキャンパスなどの案内のDM

話題3 学生の多様化と教育改革

- 学力の多様化した受験生の増加
 ⇒高校側の問題ではなく、入学試験の多様化が原因
 * 18歳人口の減少
 * 大学数の増加
 * 大学進学率の頭打ち⇒受験者数の減少
 * 大学の生き残り⇒受験生集め
 (AO入試、各種推薦入試、一芸・得意科目入試)
 * 社会の要請(生涯学習の受け皿としての大学)
 * 文科省の要請(受験生の多様な能力を評価)
 ⇒社会人、留学生の増加
- ⇒高校や社会で、異なる種々の経験を積んだ受験生の増加
 * このこと自体は決して悪いことではないと思う
 * 大学教育がそれに対応していないことが問題

- 大学の多様化
 ⇒(マーチン・トロ) エリート型・マス型・ユニバーサルアクセス型
 * 進学者の増加によってまず変化するのは
 「大学進学の意味についての学生たちの考え方」である。
- ↓
- * マス化の進む大学に学ぶ学生たちにとって、
 進学はもはや特権ではなく、当然の権利であり、
 大学は学問をするもの共同体ではなく、
 知識や技術を身につけ、学歴を手に入れる場所に
 過ぎなくなってゆく
 ⇒(学生自らがこの権利を放棄することも可能)
- * 大学は極めて保守的な組織であるから、
 こうした学生たちの変化になかなか対応できない
- ➡《学生と教員の考え方にギャップ》

- フンボルトの大学理念(教員の永遠の理想かもしれない)
 ⇒教員と学生は、「真理の探究」という
 崇高な目的に向かって大学共同体の中で共に生活する
 「教育と研究の統合」
 ⇒大衆化された大学では、こうした意識の学生は?

大衆化された大学の学生の
 価値観4タイプ(クラーク&トロ、1966)

⇒ 知識追求の強弱と
 大学への関与の強弱により4タイプに分類

- ①学問型(学究タイプ) 知識追求:強、大学関与:強
 ・知識への関心が強く、大学の授業にも熱心
 ・主体的に学習を進めるタイプ
 ・教員の価値観に近い

- ②職業型(資格志向タイプ) 知識追求:強、大学関与:弱
 ・知識への関心は強いが功利的(資格志向)
 ・就職や資格を中心
- ③カレッジ型(交友重視タイプ) 知識追求:弱、大学関与:強
 ・知識の獲得よりも、課外活動や友人との交友
 にエネルギーを費やすタイプ
 ・大学のレジャーランド化
- ④非同調型(アルバイト中心タイプ) 知識追求:弱、大学関与:弱
 ・知識への関心が低く、授業にも出ない
 ・アルバイト中心、学外活動中心

大衆化された大学の学生

- M・トロ 不本意就学者(インボランタリー学生)
- J.B.デービット 自分の将来の職業目標の不明確な学生
 (ジェネラル学生)
- 隅谷三喜男 若者の関心が理性よりも感性
 思想・哲学よりも**ハウツウ的知識・技術**に
 関心を集中する傾向が顕著
 情報化社会の中の情報爆発の反動として、
 知性や知識への関心の喪失がおきている
- 関正夫 大衆化した大学では、学生と教師の間に価値観や
 問題関心などに大きな差異があり、
 学問・教育の成立を困難にしている

学生の多様化に伴う
 学力不足・低下、勉学意欲の問題

- 学力の定義(天野郁夫)
- ①狭義の学力
 ……教育内容の問題(本来履修してくるはずの
 科目を履修していない)
 ……教育水準の問題(履修してきたが、内容の
 理解不足、到達度が低い)
- ②学習力
 ……学習技術(スキル)
 ……学習意欲
- ⇒こうした4つの側面での大学教育の対応が必要
 * 未履修科目の再教育
 * 理解不足科目の再教育
 * 学習技術育成のための教育
 * 学習意欲向上のための教育

○学力低下に関連して(大崎昌男)
 * 学生たちが学問をすることの面白さを実感すること
 * ことが難しくなっている

* 「読み書き能力」の低下
 * 「コミュニケーション能力」の低下
 * 試験に強くなる教育を受け続けたため、
 ・偏差値による学力の序列化
 ・答えのある問題への絶えざる挑戦
 → 答えは正解でなければいけない
 間違いは悪、誤解答は失敗 という意識

⇒このように育ってきた生徒が学生となり、
 「絶えざる答え」の世界から「絶えざる問い」の世界
 (知的世界)への転身が必要!

⇒この転身をどのように大学教育で果たすことができるか?

○学生の勉学態度について(北尾謙治)
 学生＝受動的態度
 * 「高校までと同様、クラスに出席していれば、十分に学習ができ、単位が取得でき卒業できる」
 * 「それに伴って、実力も自動的につく」
 * 「言われるままにしておれば、十分な知識と技能が身につく、社会に通じるパスポートが得られる」

教員 「学生は積極的に勉強しない」
 「自主的に本を読まない」
 「やる気がない」
 「教えたが学ばないのは学生が悪い」

⇒教員の期待と学生の実態が離れており、
 両者が空回りして、大学の教育・研究レベルを
 低下させている

話題 4 学生・教員と教育システム

こうした学生の多様化や学力低下に応じた
 * 教育や学生指導に対する教員の意識改革
 * 大学の教育システムの再構築 が必要と考える

John Dewey
 「誰も学んでいないのに教えたというなら、
 誰も買っていないのに売ったというのと同じだ」

扇谷 尚
 * 「自己責任原理(エリート教育原理)は破綻した」
 * 日本の大学教育は、「自己責任原理」から
 「発達支援の原理」に転換すべき

リースマン「高等教育論」
 * 大学は、大学中心の売り手市場から
 学生本位の買い手市場へと変わりつつある
 * 大学はもはや研究中心の「教える側の論理」では
 成り立ち難く、「学ぶ側の論理」を優先し、
 * 生き残りのための大学経営を第一に考えなくては
 ならない

田浦武夫「大学の機能」⇒新しい理念の模索が必要
 * 教育と研究が一本化し両立していた時代は過ぎ去った
 ①大学の大量化 (1968年、進学率19.4%)
 ②知識体系の量的拡大
 ・教えるべき基礎的知識の量が増えた
 ・研究から教育の府への色彩が濃くなった
 (教員は教育者というより研究者意識が強い)
 ③社会の期待の変化
 ・エリート・指導層の養成→中堅職業人の養成
 ・真理探究の場→職業教育の場

有本 章「大学改革の現在」
 * 高等教育の大量化や大学淘汰の状況の中で、
 大学改革による大学の機能の見直しが必要
 * 知識の内容や質が問われる知識社会では、研究を基調
 としながらも、教育の復権と学習の重要性が求められる

喜多村和之「大学教育とは何か」
 * 学生にとって大学とは、「自己発見の場」である
 * 社会構造が複雑化し、価値が多様化されればされるほど
 こうした「自己発見」に対する欲求は強まる

中教審答申「我が国の高等教育の将来像」
 * 高等教育の質の保証
 * 多様な機能と個性・特色の明確化

⇒ 高等教育の再構築が必要
 これまで通りの教育研究水準を維持しようとすると、
 否応なしに、教育熱心にならざるを得ない

大学全入時代においては、
 入学試験も大学教育も変わらざるを得ない

* いままでの受験競争時代(学生定員<進学希望者)
 ・基礎学力がある程度確保された生徒が学生になる
 ・能力(?)のない者はふるい落とされていた
 ・学生は自分で勉強する能力も持っていた
 ・大学教育もいがかげんでもよかった
 ・学歴社会において、就職もできた
 ・誰が採点しても答えが1つの問題がよかった(画一化)

⇒入りにくい大学、出やすい大学

入学センター長

* 大学全入時代、大学冬の時代、大学淘汰の時代
(学生定員>進学希望者)
・基礎学力のない者まで大学に入ってくる
・基礎学力を高める教育がより重要になってくる
・大学を出ただけでは、就職もできなくなる
・答えは多くあって、どれを選ぶかが問題となる
(課題探求能力)

⇒ 入り易い大学、出にくい大学

大学冬の時代、淘汰の時代=大学経営者の視点

「誰でも大学時代」 ・本当に勉強したい人が学べる場
・大学の社会的価値が問われる

◎ 出にくくても学生が集まる大学

◎ 能力、付加価値が付く大学

◎ 大学の二極化～勝ち組と負け組み～
* 受験生が多く、人気の高い大学とそうでない大学
* 学生を選ぶことができる大学とそうでない大学
(学生に選ばれた大学)

◎ 大学が変わらなければならない

- ・新たな教育の理念の構築
- ・幅広い人々(国民・住民)への教育
- ・教員の教育評価(従来は研究評価が主)
- ・卒業時の学生の質の保証
- ・もちろん、研究、社会活動も重要になる

◎ 学生もかわらなければならない

* 学生に対する教員の不満

- ・入学後すぐに、大学教育についていけない学生
- ・大学、学部、学科の教育や研究に関心、意欲のない学生
- ・勉強以外の活動だけに没頭する学生

この原因として、

- 偏差値等の受験情報は豊富でも、大学の教育・研究内容を知らない(偏差値だけで学部・学科を決める)
- 入学後の勉強や将来の生活を考えていない
- 大学合格を自己目的化した勉強
- 受験テクニックには長けているが、幅広い学習、視野を広める経験が乏しい

「どこの大学を出たか?ではなく、何を学んできたか?」
が問われる!

○ 学生が勉強する仕組みづくり

- * 入学前教育(推薦入学者対象)
- * 入学後の補習教育(習熟度別クラス)
- * 初年次教育、導入教育の重要性
- * 授業評価における学生の自己評価
- * 勉強優秀者の表彰制度、奨学金制度
- * GPAIに基づく退学勧告(再入学制度)
- * 早期からの就職支援活動 など

○ 教員が教育をする仕組みづくり

- * 学生の視点に立った授業・学習支援
- * 学生生活全般の指導体制
- * 教育業績評価と表彰制度
- * 学生による授業評価(授業改善)
- * 種々のFD活動 など

「大学はあまりに時代の環境や社会の要請に背を向け続けては、生き残ることができないが、時代に迎合しすぎると、大学の本来の本質である学問の自由や自治の精神、制度を喪失することによって、自ら滅びることになる。大学は二重性格的な宿命を担わされている。」(喜多村和之)

大学に望むこと(永井道雄・元文部大臣)

- ① 教師も学生も、できる限り自由に研究し、教育し、学習する場でありたい。
- ② 大学における研究と教育を通じて、私たちが人間らしい人間でありたい。人間が他の何ものかの道具であったり、手段であってはならない。
- ③ 大学は大学人のためだけにあるのではなく、社会に役に立ち、人々の生活を豊かにし、すべての人が人間らしく生きることへ貢献したい。

